

(文献検討)

看護専門学校の看護教員のキャリアに関する文献検討

山川和歌子¹⁾, 金城忍¹⁾

1) 沖縄県立看護大学

キーワード：看護教員、キャリア、看護専門学校

Key words : Nursing instructor, Career, Nursing school

I はじめに

近年、社会の変化に伴い看護職に求められる役割は拡大し、求められる看護の質も高くなっている。また、後期高齢者が急増する2025年に向けて看護職の需要が増大し、看護師等学校養成所の数も年々増加している。1992年6月に公布された「看護師等の人材確保の促進に関する法律」を契機として看護系大学が急激に増加したが、現行の看護師養成の2/3は、3年課程の看護師養成所(以下、看護専門学校とする)で行われている(日本看護協会, 2017b)。

2010年2月に報告された「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」において、看護基礎教育を充実させるために看護教員の質の向上が課題とされた。さらに、看護教員には看護実践能力と教育実践能力が求められ、両方の能力のバランスが重要とされた。看護専門学校の看護教員の要件は、3年ないし5年以上の実務経験と、看護教員養成講習会等の看護教員として必要な研修を修了することである(厚生労働省医政局, 2015)。看護実践能力については、看護教員の要件で中堅以上の実務経験が求められていることから、一定以上のレベルを有していると考えられる。しかし、教育実践能力については、研修を修了するだけでは能力の獲得は不十分だと考えられる。また、研修修了の有無にかかわらず「入職後すぐに一人前の教員としての実践が求められる」という現状が指摘(厚生労働省, 2010)されている。つまり、教育実践能力については、実務として教育実践を行いながら、その能力を獲得・向上していく必要がある。

「職業経験を通して、職業能力を蓄積していく過程」をキャリアと捉えると(厚生労働省職業能力開発局, 2002)、看護教員の教育実践能力は、看護教員が職業経験を重ねることで向上し、看護教員としてキャリアが形成されていくと考えられる。看護師のキャリアについては1990年代より「看護教育の高度化や専門性の深化、医療の高度化等を背景」(小海ら, 2007)に多くの研究が行われ、その成果が看護師の継続教育に活かされるようになってきている。その一方、看護教員のキャリアに関する研究は十分ではない。

そこで、本研究では、看護専門学校の看護教員のキャ

リアに関して、日本国内の文献において明らかにされていることを整理し、今後の研究への示唆を得ることを目的とする。

II 研究方法

1. 文献検索

医学看護学文献情報データベースである医学中央雑誌web版ver. 5を用い、「看護教員」と「キャリア」をキーワードとして平成30年4月7日に文献検索を行った結果、76件が該当した。タイトルや抄録の内容から判断し、看護専門学校の看護教員以外を対象とした文献、キャリア以外に関する内容の文献32件を除外した。さらに、会議録、解説、特集の種類文献33件を除外し、その結果11件が抽出された。それらの文献を精読し、看護専門学校の看護教員のキャリアに関する7件を分析対象とした。さらに、引用文献リストからハンドサーチを行い、上記と同様の方法で精選し、14件の文献を追加した。最終的に、21件を分析対象文献とした。

2. 分析方法

まず対象文献の著者名、発表年、タイトル、掲載誌名、研究目的、研究方法、研究対象者、主な研究結果について整理した。次に、各文献において、看護専門学校の看護教員のキャリアに関した内容に注目して類似しているものを分類し、内容を表すテーマを見出した。その後、テーマごとに文献で明らかにされていることをとり出した。

III 結果

1. 文献の概要

発行年は21件中、1989～1999年が5件、2000～2010年が7件、2011～2017年が9件であった。

研究方法は、質的研究のみが9件、量的研究のみが9件、質的・量的研究の組み合わせが2件、文献検討が1件であった。年代別にみると、1999年以前は5件中4件(80%)が量的研究のみであった。2000年以降は、16件中9件(56%)が質的研究のみであった。また、質的研究の手法としては、内容分析(カテゴリ化も含む)が5件、修

正版グラウンデッド・セオリー・アプローチが2件、看護概念創出法が1件、語りを自己物語と捉え解釈を加え意味を読み解く方法が1件であった。

2. 看護専門学校の看護教員のキャリアについて

各文献について、看護専門学校の看護教員のキャリアに関して焦点を当てている内容に注目し類似しているものを分類した結果、6つのテーマが見出された。以下、テーマごとに、文献で明らかにされていることを述べる。なお、主な研究結果以外の文献の概要を表に示す。

1) 臨床看護師から看護教員への移行段階の経験 (表1)

看護専門学校の看護教員の要件の一つとして看護教員養成講習会 (以下、講習会とする) の修了がある。講習会受講者には臨床看護師だけでなく、看護教員としての勤務経験を有している者が約20～30%前後含まれていた (鈴木ら, 2000: 箕浦ら, 1996)。講習会の受講動機は、臨床からの派遣が多かった講習会では「看護に関して幅広い知識や学習の機会」を得ることであったが、看護学

校からの派遣が多かった講習会では「看護教育の専門的知識や方法論」を学ぶことであった。また、講習会修了直後の勤務先として、教育機関は約50%であり、約45%は臨床現場であった (箕浦ら, 1996)。

講習会の意義を受講者がどのように捉えているかは、受講者の感想文や語りから示されていた (鈴木ら, 2000: 山田, 2011)。その内容は、看護教員のキャリアの初期的教育の意義だけでなく、看護専門職としての成長を支える継続教育的意義、教員としての自己の尊厳を発現する教育的意義であった。

看護師から看護教員への移行段階の経験として他に、看護教員の人材確保のために行われている看護教員インターンシップがあった。その参加者が述べた看護教員インターンシップの意味は「学生の捉え方が変わる、学生個々に応じた多様な教育技法を知る、看護教員の仕事をイメージする、看護教員としての自分を見据える、自分を客観視して自己の役割に活かす」であった (藪田ら, 2015)。

表1 臨床看護師から看護教員への移行段階の経験

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
藪田ら (2015)	看護教員インターンシップに参加することの意味	中国四国地区国立病院附属看護学校紀要	看護教員インターンシップに参加した体験が、参加者自身にどのように影響し、日頃のケアや指導に活用されているかを明らかにする	質的/自記式質問紙調査/内容分析	看護教員インターンシップ参加者(看護師、専任実習指導者、教員、その他)/17名
山田 (2011)	「看護教員としての自己」の様相に見る看護教員養成講習会の教育的意義—看護教員養成講習会の学習経験の語りから(第1報)—	日本看護研究学会雑誌	講習会での学習経験の語りにも表れる「看護教員としての自己」の特徴を明らかにし、それをもとに講習会の教育的意義を検討する	質的/半構造的面接/語りを自己物語と捉え、解釈を加え、その意味を読み解く方法	過去に看護教員養成講習会を受講し、現在も看護学校において看護教員として就業している者/15名
鈴木ら (2000)	職業的発達から見た看護婦学校看護教員養成講習会の意義—受講者の感想文の内容分析より—	千葉大学看護学部紀要	職業的発達から見た臨床看護職者にとっての意義を明らかにする	質的/感想文/ペレルソンの内容分析	千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センターで実施されている看護婦学校看護教員講習会を受講した看護職者/40名
箕浦ら (1996)	看護教員養成課程卒業生の就業状況および継続学習の実態—神奈川県立看護教育大学校看護教員養成課程卒業生と東京都立医療技術短期大学教員養成講座修了生の比較から—	神奈川県立看護大学校紀要	卒業生の活動の実態と継続学習状況について、大学校の特徴を明らかにし、より具体的な教育内容考察の資料とする	量的/質問紙調査/記述統計	神奈川県立看護教育大学校看護教員養成課程卒業生と、東京都立医療技術短期大学教員養成講座修了者/603名

2) 新人看護教員の経験 (表2)

新人看護教員 (以下、新人教員とする) は、看護教員という役割を遂行していくなかで、【看護教育の模索】、【看護教員としての存在意識の確認】、【自分が教育することへの戸惑い】、【自己と向き合う】といったストレスを感じていた (佐藤, 2009)。また、実習指導のなかでは、「実習環境の調整、学生の個性にあわせた指導、看護過程の展開方法、実習態度への指導」についてストレスを感じていた (大場, 2006)。

新人教員のストレスを成長へと結び付けることに影

響を与えた要因は、組織全体や教務主任、先輩教員、看護教員経験のある新人教員仲間など、他者からの支援であった。しかしそれだけではなく、自分で学びを増やしていくことも、ストレスを成長へと結びつけていた (佐藤, 2009)。島中ら (2016) は、新人教員が教務主任や先輩教員から受けていた支援をメンタリングの視点で検討し、その結果、新人教員が受けたメンタリングとして【教員の仕事に早く慣れるように環境を整えてくれる】【自分のことのように親身になってくれる】【いつも受け入れてくれる】【教員としての心構えを教えてくれる】教

員としての自信をつけてくれる】の5つのカテゴリー」を抽出していた。

また、看護専門学校の看護教員が、新人教員の時期に自己の職能成長に影響を受けた看護教員の学生との関

係における特性は、学生を中心としたアプローチであった。さらに、モデルとなった看護教員自身の特性として、「人格の重視、仕事に対する姿勢、周囲への影響力、論理的思考の基盤」があった(平野ら, 2010)。

表2 新人看護教員の経験

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
畠中ら (2016)	看護専門学校における 新人看護教員のメンタ リングの体験に関する 研究	キャリアと看 護	新人看護教員のメンタ リングの体験を明らか にする	質的/半構成的面接 /カテゴリ化	看護専門学校3年課程に勤 務し、教員経験年数が3年 未満の看護教員/10名
平野ら (2010)	看護教員の職能成長に 及ぼす要因の認識 モ デルとなった看護教員 の特性	三重看護学誌	看護師養成所の看護教員が新人看護 教員の時に、自己の職能成長に影響 を受けた看護教員の特性を明らかに する	質的/半構成的面接 /カテゴリ化	看護師養成所(3年課程)に おける看護教員 /10名
佐藤 (2009)	新人看護教員の役割遂 行によるストレスを成 長へと結びつけること に影響を与えた要因	神奈川県立保 健福祉大学実 践教育センタ ー 看護教育研 究集録	新人看護教員が役割遂行する課程で どのようなことをストレスと捉え、 そのストレスを成長へと結び付ける ことの影響を与えた具体的要因は何 かを明らかにし、その過程における 具体的な支援の示唆を得る	質的/半構成的面接 /カテゴリ化	講習会修了後、看護専門学 校に勤務した2年目の看護 教員で、【看護師から看護教 員への移行に伴う混乱】から 【看護観・教育観の整理】 へと成長したと教務主任が 判断した者/4名
大場 (2006)	新人看護教員の自己教 育力の検討 実習指導 における自己評価と振 り返りを分析して	神奈川県立保 健福祉大学実 践教育センタ ー 看護教育研 究集録	新人看護教員の実習教授活動におけ る自己評価、および困難を感じた事 実、それらの判断と行動を分析し、 新人看護教員の自己教育力向上への プロセスを検討する	質的・量的/半構 成的面接・自己評価表 /関連している内容 を項目分類・記述統 計	神奈川県内の看護専門学校 に勤務している新人看護教 員/4名

3) 看護教員のストレス、バーンアウト(表3)

看護専門学校の看護教員の「教員経験年数と専任教員要件はストレス因子の『多忙』に、ソーシャルサポートはストレス因子の『職場環境』『教員資質』『研究資源』に負の関係性」があった(原田ら, 2012)。さらに、ストレスの要因には、学生指導の困難感や、教員役割に対しての自信低下、教員業務の遂行困難、人的サポート不足があった(大山, 2012)。

また、稲岡ら(1994)の調査研究によるバーンアウト率は、看護専門学校・短期大学・大学の看護教員は平均で10.9%、看護師は31.7%、中学校教員は41.2%であっ

た。看護教員の中では、大学の看護教員が最も低く6.2%であったのに対し、看護専門学校の看護教員は16.3%とバーンアウト率は高かった。そして、バーンアウトに関与している要因として、基本的な生活習慣や態度・行動の育成を看護教育のなかで重視し実践していることや、教育以外の仕事が多いこと、教育実践上での問題を感じていること、問題に対して消極的な解決法をとることがあげられていた。さらに、原田ら(2012)は、ストレス因子の「多忙」はバーンアウト尺度の「情緒的消耗感」に、有意に正の関係性があることを示していた。

表3 看護教員のストレス、バーンアウト

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
原田ら (2012)	看護師養成所における 看護教員のストレスと ソーシャルサポート及 びバーンアウトの関係 性	日本看護学教 育学会誌	看護教員の教員経験年数とストレ ス、ソーシャルサポート及びバー ンアウトの関係、加えて専任教員の要 件及びソーシャルサポートとストレ スの関係を明らかにする	量的/自記式質問紙 調査/推計調査	中国地方の看護師養成所に 勤務する管理職を除いた看 護教員/203名
大山 (2012)	看護専門学校教員の職 業性ストレスとバー ンアウトの関連	日本看護福祉 学会誌	看護教員に特化したストレスとバー ンアウトに関する調査を行い、スト レス因子とバーンアウトの関連を明 らかにする	量的/自記式質問紙 調査/推測統計	大阪府下にある看護専門学 校の看護教員 /101名
稲岡ら (1994)	看護教員の BURNOUT と BURNOUT に関与する心理 社会的・教育的要因-看 護専門学校・看護短期大 学・看護系大学教員との 比較をととして-	日本看護学会 誌	看護教員の BURNOUT の実態と BURNOUT に関与していると思われる 心理社会的・教育的要因を明らかに する	量的/自記式質問紙 調査/推測統計	全国の看護専門学校と短期 大学、4年制看護系大学の 看護教員/1,643名

4) 看護教員の職業意識(表4)

看護専門学校の看護教員が、看護教員となった動機・契機は人事異動や上司の薦め・命令など他律的なものが多かった(草柳, 2014; 濱田ら, 1989)。看護専門学校の看護教員の職務上の意識の特色としては、「看護教育観が多様に分散しており、とりわけ学生の量や質、学生との関係などに対して悩みをもつ者が多く、その解決も自分自身で見出し難いという状態」が指摘されていた(濱田ら, 1989)。

草柳(2011)は、看護教員のキャリアについて文献検討し自己の見解として、看護教員は「一定の期間を保健医療施設の現場を離れ教員として働いても、再び臨床看護師としてのキャリアを積むことができるという特徴がある。このことから『看護教員は看護師としてのキャリア形成の一部である』と捉えることができる」と述べていた。

次に、看護専門学校の看護教員の職業継続意思がある者は、対象者全体の30.1%(草柳, 2014)、52.6%(石田ら, 2003)であった。職業継続意思には、年齢や性別、

職位、経験年数などの外的キャリアよりも、コミットメントの対象や職業アイデンティティ、看護実践力認知などの内的キャリアが影響しており、教員に対してコミットメントを有する者、看護実践能力の低下や不十分さの自覚をしている者は職業継続意思が有意に高かった(草柳, 2014)。さらに、職業継続意思がある者はない者に比べて、看護教員職業アイデンティティ尺度の得点が有意に高く(石田ら, 2003)、一方、看護師へのコミットメントが高い場合は、教員アイデンティティが形成されにくいことが示唆されていた(草柳, 2014)。

また、濱田ら(1994)の調査結果では、看護教員就任後に大学教育を受けた者は、短期大学の看護教員が32.7%であったのに対し、看護専門学校の看護教員は14.0%であった。また、看護教員就任後に大学教育を受けた者は、受けていない者より、日頃の教育意欲・活動状態などにおいて意欲的、積極的で、看護教育実践上の問題点に対し自主的に研究会へ参加したり、社会的な諸関係を利用したりして問題解決策を見出していた。

表4 看護教員の職業意識

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
草柳 (2014)	看護専門学校に働く看護教員のキャリアに影響する要因—外的・内的キャリアと就業継続意思との関連性—	東京女子医科大学看護学会誌	看護専門学校の教員の外的キャリアおよび内的キャリアが、教員としての就業継続意思にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする	量的/調査用紙/推測統計	「2007年版看護学校名簿」より無作為抽出した51校に勤務する看護教員と、インターネットで募集した看護学校教員/285名
草柳 (2011)	看護専門学校教員のキャリア形成に関する文献検討	東京女子医科大学看護学会誌	看護専門学校の看護教員の現状からみた、看護教員の質、キャリア形成、キャリア支援について、既存の文献から検討し、筆者の見解を述べる	文献検討	
石田ら (2003)	看護教員の職業アイデンティティに関連する要因	日本看護学教育学会誌	看護教員の職業アイデンティティに関連する要因を性別・年齢・教員経験年数・継続意思・役割モデル等、教員の背景に焦点をあてて明らかにする	量的/質問紙調査/推測統計	1998年版の看護学校名簿、1999年度版の看護系大学教員名簿で男性教員が勤務している看護師養成女学校の看護教員で男女比1対3の割合で調査依頼/327名
濱田ら (1994)	看護教員の職務意識に影響する就職後の再教育	日本赤十字看護大学紀要	看護教員就任後に受け直した学校教育によって「看護教員の職務」に重要な影響をもたらしているのではないかとという仮説のもとに分析を試み、再教育の意義をとらえる	量的/自記式アンケート調査/推測統計	全国の看護短期大学、看護専門学校の看護教員/1,563名
濱田ら (1989)	看護系各教育機関における看護教員の属性と職務意識についての調査研究—4年制大学・短期大学・専門学校間の比較分析を中心に—	日本赤十字看護大学紀要	4年制看護大学・看護短期大学・看護専門学校の間で、それぞれの教員が勤務する看護教育機関の相違から生ずる問題点を明らかにする	量的/自記式アンケート調査/推測統計	全国の看護系大学、看護短期大学、看護専門学校の看護教員/1,643名

5) 看護教員の力量、能力 (表5)

看護教員の力量形成に影響を与える要因は、教員経験年数が長いこと、専任教員より教務主任であること、講習会受講の経験があること、進学希望があることであった(大津ら, 2006)。また、能力・資質形成の契機として看護教員が認識しているのは、『学校外での研究活動』『教育実践上の経験』『学校内のすぐれた人物』などであった(江崎, 1998)。

田中ら(2016)は、熟達看護教員の力量形成過程を明らかにしていた。その内容は、「熟達看護教員は、【新人：

逆境に遭遇し内省する】経験を積み重ね、学びの共同体の中で【一人前・中堅：協働し学びつづける】ことを通して【熟達：役割を自覚し自身がモデルを示す】在り方へと力量を形成していた。それらはらせん状を描きながら《力量形成過程》を示しており、【学生に伴走する】、【臨床の知の獲得】、【新しい知識の構築】という《教授活動の実際》につながっていた。その経験の根底には【自己の看護教育観を見つめ直す】、【キャリアを描き続ける】という《力量形成の基盤》が存在していた」ということであった。

表5 看護教員の力量、能力

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
田中 (2016)	経験の語りにもみる熟達看護教員の力量形成過程	日本看護学教育学会誌	熟達看護教員はどのような経験を重ね、どのように自らの教員としての力量形成をしているのか、その過程を明らかにする	質的/半構成的面接 /修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	看護系大学、短期大学、看護専門学校、5年一貫看護師養成課程の熟達看護教員(面接時の教員経験が10年以上の者) / 11名
大津ら (2006)	看護教員の力量形成に影響を与える要因分析	日本看護医療学会雑誌	看護教員の力量形成に影響を与える要因および進学希望に影響を与える要因を明らかにする	量的/自記式質問紙調査/推測統計	東海4県の看護師・准看護師教育に携わっている専門学校の看護教員 / 390名
江崎 (1998)	看護教員の能力・資質形成の契機	日本看護学教育学会誌	看護教員の能力・資質形成の契機とそれらの契機に生じた変化を明らかにする	量的・質的/質問紙調査/記述統計・自由記載のキーワードを内容ごとに分類	全国の看護基礎教育機関(大学・短期大学・看護専門学校)の教員 / 310名

6) 看護教員のキャリアに関連する概念 (表6)

山澄ら(2005)は、看護専門学校に所属する看護教員の職業経験を説明する7つの概念を創出していた。その内容は、【教育目標達成のための経験の伝承と活用】、【教員間協同による教育活動適正化】、【看護職養成教育への理解進展による教育活動の個別化と専門学校教育の限界への直面】、【目標達成困難の査定による教育内容補完と目標水準低減化】、【学的基盤脆弱さの自覚と克服への試み】、【教員経験累積に伴う役割拡大による充実感と不全

感の知覚】、【人事異動による教育職への就任と教育職への専心困難】であった。

田中ら(2017)は、看護専門学校の看護教員の職業キャリア成熟の経時的な構造を明らかにしており、その構造は、【教員キャリアの準備状態】、【看護師から教員への役割移行】、【教員の職務と取り組み】、【職場環境の良・不良】、【教員としての成長・発達】、【キャリアに対する展望】というカテゴリーであった。

表6 看護教員のキャリアに関連する概念

著者 (発行年)	タイトル	掲載誌	目的	研究方法(デザイン/ データ収集/分析)	研究対象者/対象者数
田中 (2017)	看護専門学校教員における職業キャリア成熟の構造	富山大学看護学会誌	看護専門学校教員個人の内面的要因を加えた半構成的面接調査により、職業キャリア成熟の構造を明らかにする	質的/半構成的面接 /修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	A県内の看護専門学校に勤務する看護教員で、離職願望のないと思われる者 / 8名
山澄ら (2005)	看護専門学校に所属する教員の職業経験の概念化	日本看護学教育学会誌	看護専門学校に所属する教員の職業経験を表す概念を創出することにより、その総体を明らかにし、職業経験の特徴について考察する	質的/半構造化面接 /看護概念創出法	看護専門学校に所属する就業年数4年以上の教員 / 22名

IV 考察

1. 看護専門学校の看護教員のキャリアに関する文献の概要

看護専門学校の看護教員のキャリアに関する論文は、雑誌の特集や講演集としては発表されているが、研究論文としてまとめられているものは少なかった。また、2000年以降は、看護教員の経験に焦点を当てた研究が増え、半構成的面接や記録の内容分析などの質的研究手法が用いられていた。これは、看護分野で質的研究による論文発表の増加の時期と重なる(関島ら, 2005)。一方、看護専門学校の看護教員に関する全国規模の調査研究は、昭和61～63年の調査(稲岡ら, 1994; 濱田ら, 1994; 濱田ら, 1989)以降は見られない。近年、看護系大学だけでなく看護師養成所学校全体が増加し、看護教員数も増加している(日本看護協会, 2017a)ことから、看護専門学校の看護教員のキャリアの基礎資料として、動向を把握する必要があると考える。

2. 看護専門学校の看護教員のキャリアについて

キャリアを‘職業経験を通して職業能力を蓄積していく過程’と捉え、看護教員の職業継続と職業能力の観点から考察する。

1) 看護教員の職業継続の状況と課題

看護専門学校の看護教員のキャリアの準備段階は、看護教員の要件の一つでもある講習会の受講がある。しかし、講習会の受講時には、すでに看護教員として勤務を経験している者が約20～30%いた。看護専門学校の看護教員は、講習会受講の有無に関係なく「入職後すぐに一人前の教員としての実践が求められる」(厚労省, 2010)という現状が指摘されており、一定数の看護教員がその準備教育を受けずに職業キャリアを歩み始めている。大学教員の場合は、講習会受講は教員の要件に入っていないが、その多くが教育能力を育成する助手の期間を経ており、職業キャリアの出発の仕方に違いがある。

また、職業継続意思のある看護教員は半数を下回っており、病院看護師の約80%(撫養ら, 2014)に比べて少ない。看護教員の職業継続意思には、外的キャリアよりも内的キャリアが影響していたが、講習会は、その受講の動機や受講者の背景から、必ずしも看護教員としてのキャリアの初期段階とはいえ、看護教員としてのアイデンティティ形成がされにくいことに影響を与えていると考えられる。

次に、看護教員のバーンアウト率は学校の種類を問わず類似職種に比べ低かったが、看護専門学校の看護教員は、短期大学や大学の看護教員よりバーンアウト率が高かった。その要因として、基本的な生活習慣や態度・行動の育成を看護教育のなかで重視し実践していることや、学生の生活指導やクラス管理・運営など教育活動以外が多いことなどがあった。このような教育活動以外の仕事が多いことは、教育・研究が重視される大学教員との大

きな違いであり、このような違いが、バーンアウトに影響していることが考えられる。

2) 看護教員の職業能力の状況と課題

看護教員の力量や能力には、教員経験年数が長いこと、専任教員より教務主任であることが有意に影響を与えていた。看護専門学校の看護教員の職業能力は、教育活動や学生への生活指導、管理・運営が主である。看護教員としての準備教育が必ずしも十分とは云えないことから、これらの能力は、経験の積み重ねにより培われていることが推測される。また、「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」(厚労省, 2010)では、看護教員には看護実践能力と教育実践能力が求められ、両方の能力のバランスが重要とされている。しかし、看護教員のキャリアにおいて、教員を続けながら、教育実践能力とのバランスを取りつつ看護実践能力を維持・向上していくための取り組みは十分ではないと考える。このことは、看護専門学校だけでなく、大学も含めた看護教員全体の課題と考えられる。

3) 看護教員としてのキャリア

看護専門学校の看護教員のキャリアについて、文献の中には看護師のキャリアの一部という見解もあった。確かに、看護教員のキャリアで得る能力は、現任教育や看護管理に活かすことができるため、看護師のキャリアの一部として捉えることができる。しかし、看護専門学校の看護教員の役割は、看護学生が看護実践能力を獲得すると共に、専門職者としての態度を身につけるよう支援することである。そのために、看護実践能力と教育実践能力が求められるため、看護教員としての経験の積み重ねが必要である。

また、看護教員の職業継続には内的キャリアが影響していることから、「職業経験を通して職業能力を蓄積していく過程」をどのような意識で経験していくかが重要と考える。

これらのことから、看護教員のキャリアは、看護師のキャリアの一部として捉えるのではなく、看護師と教員の両方の視点を持つ、看護師とは異なるキャリアとして捉える必要があると考える。そのため、看護教員のキャリアに関する研究において、看護師と教員の視点と、両方の実践能力が求められるという特性を前提にすることが重要である。

V まとめ

看護専門学校の看護教員のキャリアに関して、以下のことが明らかにされていた。

1) 看護教員のキャリアに関して論文としてまとめられているものは少ない。また、近年、質的研究が増えており、全国規模の調査研究は行われていない。

2) 看護専門学校の看護教員の準備教育の一つである専任教員養成講習会を受講せずに看護教員になっている者や、受講しても看護教員にならない者もいる。新人看護

教員については、メンタリングなどの支援や職能成長への影響が明らかにされていた。

3) 看護教員のバーンアウト率は類似職種に比べ低かったが、看護専門学校の看護教員は、短期大学や大学の看護教員より高かった。看護専門学校の看護教員は、教育活動以外の仕事が多いことなどがバーンアウトに影響していた。また、職業継続意思のある看護教員は、病院看護師に比べて少なかった。

4) 看護教員の力量形成過程と、職業キャリア成熟の構造について明らかにされていた。

看護専門学校の看護教員は、看護師とは異なるキャリアと捉えることが必要であり、看護師と教員の両方の視点が求められるという看護教員の特性を踏まえた研究が必要である。今回、看護専門学校の看護教員を対象としてキャリアについて文献検討を行ったが、今後は、大学の看護教員のキャリアについても整理し、その共通性や相異性を検討していくことが必要である。

文献

- 江崎フサ子. (1998). 看護教員の能力・資質形成の契機. 日本看護学教育学会誌, 8(1), 29-39.
- 濱田悦子, 佐々木幾美. (1994). 看護教員の職務意識に影響する就職後の再教育. 日本赤十字看護大学紀要, 8, 45-58.
- 濱田悦子, 樋口康子, 稲岡文昭他. (1989). 看護系各教育機関における看護教員の属性と職務意識についての調査研究—4年制大学・短期大学・専門学校間の比較分析を中心に—. 日本赤十字看護大学紀要, 3, 42-53.
- 原田浩二, 森山美知子, 小林敏生. (2012). 看護師養成所における看護教員のストレスとソーシャルサポート及びバーンアウトの関係性. 日本看護学教育学会誌, 22(1), 25-34.
- 畠中ゆかり, 高橋永子. (2016). 看護専門学校における新人看護教員のメンタリングの体験に関する研究. キャリアと看護研究, 6(1), 14-23.
- 平野加代子, 清水房枝, 伊津美孝子. (2010). 看護教員の職能成長におよぼす要因の認識—モデルとなった看護教員の特性—. 三重看護学会誌, 12, 53-58.
- 稲岡文昭, 浜田悦子, 樋口康子. (1994). 看護教員のBURNOUTとBURNOUTに關与する心理社会的・教育的要因—看護専門学校・看護短期大学・看護系大学教員との比較をとおして—. 日本看護学会誌, 3(1), 38-49.
- 石田貞代, 塚本浩子, 望月好子他. (2003). 看護教員の職業アイデンティティに關連する要因. 日本看護学教育学会誌, 12(3), 1-9.
- 小海節美, 津島ひろ江. (2007). 保健・看護職のキャリア発達に関する研究動向. 川崎医療福祉学会誌, 17(1), 185-193.
- 厚生労働省. (2010). 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書.
- 厚生労働省医政局. (2015). 看護師等養成所の運営に関するガイドラインについて.
- 厚生労働省職業能力開発局. (2002). 「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3a.html> (2018年3月27日).
- 草柳かほる. (2014). 看護専門学校に働く看護教員のキャリアに影響する要因—外的・内的キャリアと就業継続意思との関連性—. 東京女子医科大学看護学会誌, 9(1), 39-47.
- 草柳かほる. (2011). 看護専門学校教員のキャリア形成に関する文献検討. 東京女子医科大学看護学会誌, 6(1), 15-21.
- 箕浦とき子, 上田規子, 坪千代子他. (1996). 看護教員養成課程卒業生の就業状況および継続学習の実態—神奈川県立看護教育大学校・看護教員養成課程卒業生と東京都立医療技術短期大学教員養成講座修了者の比較から—. 神奈川県立看護大学校紀要, 19, 99-112.
- 撫養真紀子, 池亀みどり, 河村美枝子他. (2014). 大阪府立大学看護学部紀要, 20(1), 29-37.
- 日本看護協会. (2017a). 平成28年看護関係統計資料集 I. 就業状況 1. 就業者数 (4) 看護師・准看護師 (年次別・就業場所別). <http://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei04.pdf> (平成30年5月1日)
- 日本看護協会. (2017b). 平成28年看護関係統計資料集 II. 養成状況 学校養成所数及び定員 (1) 年次別. <https://www.nurse.or.jp/home/statistics/pdf/toukei11.pdf> (平成30年5月1日)
- 大場志乃. (2006). 新人看護教員の自己教育力の検討—実習指導における自己評価と振り返りを分析して—. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録, 31, 66-172.
- 大津廣子, 望月章子, 足立みゆき他. (2006). 看護教員の力量形成に影響を与える要因分析. 日本看護医療学会雑誌, 8(1), 21-30.
- 大山末美. (2012). 看護専門学校教員の職業性ストレスとバーンアウトの関連. 日本看護福祉学会誌, 17(2), 79-92.
- 佐藤典子. (2009). 新人看護教員の役割遂行によるストレスを成長へと結びつけることに影響を与えた要因. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録, 34, 62-69.
- 関島香代子, 香月富士日, 高木廣文他. (2005). 医学中央雑誌にみる看護研究における質的研究の動向. 新潟大学医学部保健学科紀要, 8(1), 63-85.
- 鈴木純恵, 鶴澤陽子. (2000). 職業的発達からみた看護

護婦学校看護教員講習会の意義. 千葉大学看護学部紀要, 22, 7-13.

田仲千尋, 岡崎美智子. (2016). 経験の語りにもみる熟達看護教員の力量形成過程. 日本看護学教育学会誌, 26(2), 29-41.

田中いずみ, 比嘉勇人, 山田恵子. (2017). 看護専門学校教員における職業キャリア成熟の構造. 富山大学看護学会誌, 16(2), 151-171.

藪田素子, 安藤恵子, 武森八智代他. (2015). 看護教員インターンシップに参加することの意味. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 11, 85-97.

山田千春. (2011). 「看護教員としての自己」の様相に見る看護教員養成講習会の教育的意義—看護教員養成講習会の学習経験の語りから(第1報)—. 日本看護研究学会雑誌, 34(2), 85-96.

山澄直美, 舟島なをみ, 定廣和香子他. (2005). 看護専門学校に所属する教員の職業経験の概念化. 日本看護学教育学会誌, 15(2), 1-12.